

P-8-23

看護師の呼吸回数測定率向上に対する取り組みの成果

横浜市立みなと赤十字病院 看護部 ICU病棟

○石鉢 ひとみ

1. はじめに 一般的に重篤な有害事象や院内の予期せぬ死亡は突然発生するのではなく、60～70%の症例で心肺停止の6～8時間前に急変の兆候が認められると報告されている。しかし、横浜市立みなと赤十字病院では状態悪化後の患者の記録をさかのぼって見ると、呼吸回数測定がされていない現状が見受けられた。そこで、看護師の呼吸回数測定率の向上を目的とした教育を行なったため、以下に報告する。2. 研究方法 2018年6月～2019年3月まで、横浜市立みなと赤十字病院の全14病棟（ICUは除く）に入院していた患者のうち、1日/月の定点調査日に対象病棟に入院中の患者のなかから無作為に患者を20名選定し、呼吸回数測定が1回/日以上、記録されているかを調査した。呼吸回数測定実態調査結果は、集中ケア認定看護師通信を用いたフィードバックを毎月1回紙面で実施、また、2018年9月に院内救急サポートチームによる「急変兆候気づきコース」を開催して、呼吸回数測定の重要性を教育していった。3. 倫理的配慮 院内の自主臨床研究審査委員会にて承認を得た。4. 結果 2018年6月に呼吸回数記載が一番低かった病棟の記載率は0%、一番高かった病棟の記載率は85%、全病棟の記載率の平均は32%だった。2019年3月の一番低かった病棟の記載率は10%、一番高かった病棟の記載率は100%、全病棟の記載率の平均は58%へ上昇した。1年間おいて記載率の改善がほぼ見られなかった病棟が2病棟、記載率が改善した病棟が12病棟となった。5. 考察 記載率は上昇しており、教育効果はあったと考えられる。しかし、記載率はまだ50%台であり、まったく改善がみられなかった部署もあるため、紙面以外でのフィードバックを考慮する必要がある。

P-8-25

縊頸患者と動揺が激しい家族の最期の時を繋ぐための看護支援

さいたま赤十字病院 救急病棟A

○三吉 ゆう子

【背景】自傷行為により突然に終末期を迎えた患者家族は激しく動揺することが多く、看護師は家族を支えることが求められる。【目的】危機的状況にある患者と家族の最期の時を繋ぐために行った看護実践の内容を明らかにする。【事例の概要】家族と口論後に縊頸の男性患者。心肺停止状態で救命困難であったが救急病棟に入院。家族の動揺が激しく、昇圧剤を使用するが徐々に血圧・心拍数低下し、家族に見守られながら永眠された。【方法】支援の経過を振り返り、家族が変化していききっかけとなった看護実践は何かを、同病棟スタッフ、大学教員と検討した。看護実践のカテゴリー、サブカテゴリーを作り看護実践を書き入れ、現場での実践を適切に表現できているか、話し合い修正を重ねた。【倫理的配慮】当院の規定に則り、患者及び家族のプライバシー確保に十分な配慮を行った。【結果】入院時、家族は警察の事情聴取のため一時帰宅中であり、しばらく来院しなかったため、患者と家族が「離れていても安心し繋がっていられるようにする」ため、家族に電話し患者状態を伝え来院する時間を確認した。家族来院後は動揺が激しかったので「こまめに訪室」「そばに寄り添い」「タッチング」を行い感情の表出を促し「家族の思い」を聞き「家族が落ち着いて患者の傍にいられる場を整えた。患者状態変化時は「受け入れるのに必要な時間を調整する」ために医師に相談し「昇圧剤を調整した。」「最期の時を迎える」時、家族はまだ動揺していたが「患者の傍に行き」「患者の手をとること」ができた。【考察】「椅子を患者の近くに寄せる」「手の握り方を示す」「必要な時間を確保するため昇圧剤を調整する」により、最期の時を患者と家族が繋がるようにしたものであったと考えられる。

P-8-27

外来看護師対象のがん看護勉強会を開催して

諏訪赤十字病院 看護部

○倉田 絵理、橋爪 陸

【はじめに】A病院は、地域がん診療連携拠点病院であり、外来における告知後から早期に緩和ケアが提供できる体制整備と充実が求められている。院内で実施されている緩和ケアの研修などに、外来看護師が参加することが少なく、また院内にがん看護全般に関する研修がない。しかし、外来看護師が業務の中で困難と感じていることは、薬剤（特に医療麻薬）に関する患者への説明、メンタルケア、緩和ケア介入やコンサルテーションのタイミングが難しいなどが聞かれていた。2016年よりがん看護外来を開設した。それに伴い、がん患者指導管理科1、2の算定が増加している。しかし、外来看護師から認定看護師や多職種につなげることが少なく、コミュニケーションの方法や多職種につなげる方法の知識不足も考えられた。がん患者と家族に関わる外来看護師が、求められる役割を理解し、患者の療養生活を支援するための基本的な知識・技術を習得するためとして、勉強会を計画した。【方法】外来看護師はパート勤務者が多いため、参加可能な時間や曜日が限られた。まずは、認定看護師と外来管理者と一緒に、開催回数や時間や内容などを検討した。また勉強会の後に、毎回アンケート調査をおこなった。【結果】開催日は、平日17時15分からの1時間とした。実施した勉強会の内容は、2017年は、「医療用麻薬の基本を学ぶ」、「外来看護師に求められる役割を学ぶ」、2018年は、「放射線治療を受ける患者へのケア」、「脱毛のケア、乳がん治療を受ける患者へのケア」、「免疫チェックポイント阻害剤について」をおこなった。【結論】外来看護師対象の勉強会は、有効であった。外来看護師が、勉強会後に現場で実践した結果を評価し、今後の勉強会の開催時間や内容を、現場の看護師と相談しながら検討していく。

P-8-24

ICU/HCU病棟でSGA実施後NST介入しない患者から考えある栄養アセスメントの視点

横浜市立みなと赤十字病院 看護部

○安田 真弓、石鉢 一美

【はじめに】ICU/HCUでSGAを実施し下痢は問題となったが、NST介入は検討されず、一般病棟に転棟後NST介入となった患者から私たちに不足しているアセスメントの視点を考える。【事例紹介】CPA蘇生後にICU/HCUに計19日間入室していた救急科の患者。ICU/HCU入室翌日より経腸栄養持続投与が開始する。しかし経腸栄養開始後、プリストルスケール6の排便が持続する。当初はプリストルスケール6の便が平均4回/日あり、経腸栄養剤や投与方法を検討した。下痢のコントロールがつかないまま19病日目に一般病棟転棟となり20病日目に転棟先の病棟よりNST介入依頼提出、21病日目からNST介入となり、経腸栄養剤の種類や継続継続を検討したりと介入がされ、下痢が改善しその後転院となる。【考察】「日本版重症患者の栄養療法ガイドライン」では、「重症患者では、重度の栄養障害をもたらす、感染合併症や死亡率の増加などの予後悪化因子に繋がる」とあり、ICU/HCUでの経腸栄養は治療的要素が強い。一方「病棟看護師の栄養管理における役割」では、「経腸栄養は患者の生命を支える重要な役割があり、特別なことではなく古来より療養上の世話として重要な要素に位置づけられている」とあり、急性期を脱すると、経腸栄養は患者の基本的ニーズを充足するための手段の1つであると考えられる。よって下痢を始めとする経腸栄養トラブルが、患者のQOL低下に繋がる要因の一つとして顕著になる。超急性期、急性期の患者の救命を優先する病期に携わるICU/HCU看護師は、経腸栄養管理が療養上の世話に値する事、下痢を始めとする経腸栄養トラブルが患者のQOL低下の一因となるアセスメントの視点が弱いのではないかと考える。

P-8-26

リハビリ介入の早期化を図る取り組み

名古屋第一赤十字病院 看護部

○西尾 栄美、錦戸 幸

【はじめに】現在の集中治療においてABCDEFバンドルは、PICS予防として重要視されている。早期リハビリテーション（以下リハビリと略す）に関して、48時間以内に早期離床チームが介入した群と、そうでない群でその効果を比較した研究がある。早期離床チームが介入した群では、より短期間に離床ができ、ICU在室日数が短縮したという報告がある。入院時から患者に関わる看護師がリハビリを開始することで、早期離床の実現に寄与すると考え、ROM訓練導入に取り組んだため報告する。【目的】理学療法士にリハビリを委ねるのではなく、病棟全体をチームとして48時間以内にリハビリ介入を実施する。【方法】リハビリプロトコルを使用し48時間以内に、入室患者へROM訓練の実施を開始し、2018年4月～2018年11月の期間で、看護師が介入する前後の実施率比較。【倫理的配慮】本調査で得られたデータは個人が特定されないように配慮した。【結果】入室48時間以内にROM訓練を開始する旨を、趣旨と共に全スタッフへ共有し、その後リハビリ技師と共に、ROM訓練について勉強会を実施。はじめは実施率の向上はみられなかったが、チェックリストなどを利用して実施漏れがないよう取り組むことで、実施率上昇につながった。その結果、看護師がリハビリ介入する前の実施率は2018年4月で10.6%であったが、介入後の実施率は2018年11月82.75%と大幅に増加した。【考察】早期リハビリ介入を理学療法士に委ねていたが、まずは、その必要性を看護師一人一人が理解することが必要である。各々の役割はあるが、医療はチームで成り立っているため、誰かに委ねるのではなく、チームとして行動することが必要であると感じた。今回のような取り組みを実施したことで、看護師の早期リハビリに対する意識も向上し、ROM訓練の実施を確立することができた。

P-8-28

乳がん看護に関するスタッフ教育の取り組みと課題

旭川赤十字病院 看護部

○増子 葉月、唐川 美和、高橋久美子

【はじめに】A病棟は消化器内外科における急性期看護から終末期看護を実践している。特に乳がん看護は、手術や化学療法、終末期における専門的ケアが必要とされている。しかし、これまでスタッフに対しての知識、技術のスキルアップの為の学習の機会が少なく、個人の知識の程度を確認する機会がなかった。そこで、患者が安心して治療を受けられるために、専門的ケアを目指した教育的支援を行なった。【研究目的】病棟看護師の乳がん看護専門的ケア向上を目指す知識や技術の習得【研究方法】期間：平成29年6月～3月 研究対象：A病棟に勤務するスタッフ28名 研究方法：1. 計12回の勉強会実施後、8点/10点以上を目標とし、乳がんの病態生理や治療方法等の知識を確認する知識度テスト（以下テスト）、患者事例学習会を実施した。2. その後、勉強会や患者事例学習会開催に関してのアンケート調査を実施した。【結果】知識度テストの結果は計4回の平均点が9.4点だった。アンケート結果は「学習会でこの学びは実際の看護に活かすことができた」(61%)「治療方針を理解できた」(100%)「今後も勉強会を継続したい」(100%)と回答した。【考察】8点/10点以上を目指してテストを実施したが、平均9点以上と予想を上回る結果となった。このことから、テストを実施することは、勉強会に参加していないスタッフも資料に目を通す事となり、自己学習をする機会に繋がったと考える。また、患者事例学習会の実施は、学習した内容と実際の患者の治療経過を照らし合わせる事で患者の疾患の理解を深め、勉強会での内容を振り返る機会となり、知識が身に付くことと考えられる。今後は今回学んだ知識と実践を結び付けた看護が行なえているかの評価を行なうことが課題である。